

子作りのために偽装婚!?
のはずが、訳あり王子に
溺愛されてます



皐月もも

Momo
Satsuki

目次

子作りのために偽装婚!?のはずが、
訳あり王子に溺愛されています

番外編

人生で一番幸せな日

書き下ろし番外編

世界で一番輝く星

317

287

5

子作りのために偽装婚!?のはずが、
訳あり王子に溺愛されています

序章

暖かな春の光が差し込むサロンには、その穏やかな空気に似つかわしくない悲鳴が飛び交っていた。

「早く侍医を！」

「茶を淹れたのは誰だ!？」

「逃がすな！ 捕まえろ」

「ひいいっ、私は何も……っ」

茶を淹れたメイドが取り押さえられ、執事が侍医呼びにサロンを出ていく中、リカルドは向かいに座っていた母ソニアに駆け寄った。

「母上、母上……っ！ 誰か早く母上を助けてくれ！」

ソニアは床に倒れ込み、小刻みに震えながら息子の袖を掴む。

その真っ白いシャツには赤い染みが滲んでいった。

「リ、カルド……」

「母上、大丈夫です。すぐに侍医が来ますから」

母の紫色の綺麗な瞳に、しっかりと自分が映っている。

たった一口の紅茶で、人が——母が、死ぬわけがない。

きっと大丈夫。

そう思うのに、彼女の瞳が虚ろになつていくのを見ると、涙が止まらなかつた。

「母上、目を閉じてはいけません。母上……母上、しっかりと……」

ソニアの手から力が抜けていく。

震える唇がやんわりと弧を描き、呼吸音が小さくなって……

「あい、して……ます……あな、た……生きて……リカルド」

「っ、母上？ 母上！ 母上っ!!」

最期、息子の名前をはっきりと呼び、ソニアは動かなくなった。

リカルドの腕の中の彼女にはまだ体温が残っているのに——

バタバタとサロンに駆け込んでくる者たちの足音は、リカルドの慟哭でかき消された。

シャルドワ王国の側室ソニア・アルリーヴァが毒殺された。

捕らえられたメイドの証言から、黒幕は同じ側室の一人だと判明した。子を授からなかった彼女は、リカルドという優秀な王子とその母親であるソニアを妬んでいたという。側室のちに牢で自害し、人々はこの恐ろしい毒殺事件の犯人がいなくなったことに安堵した。

それと同時に、母親の死を目の当たりにしたりリカルドが心を壊し、幼い振る舞いをするようになったことを嘆くのだった――

第一章

キラキラと輝くシャンデリアの光は、満天の星とは似ても似つかない。

煌めく宝石のアクセサリーと最高級の生地を使ったドレスで着飾った令嬢たちに紛れ、セラフィーナ・パルヴィスはこっそりため息をついた。

(やっぱりパーティーは苦手だわ)

眩しすぎる照明も、豪華な装飾も、セラフィーナにはなじみのないものばかり。見るからに高級だとわかるものに囲まれていては緊張もするし、気疲れしてしまう。

貴族と一口に言っても、地位や名声の差がある。贅を尽くして暮らしている者もいれば、慎ましやかに公務に励むだけの者もいて、男爵位を賜るパルヴィス家は後者だ。

セラフィーナは、ここシャルドワ王国の東側にある小さな田舎領地の出身である。庶民と比べれば裕福という程度の、貴族社会では冴えない田舎者。

パルヴィス家当主である父マルティーノは首都で仕事をすることもあるが、セラフィーナは違う。

普段、彼女がこんなに豪華なパーティーに招待されることなどない。

二年ほど前に済ませた社交界デビューのときも、首都の煌びやかな雰囲気になじめず、結局今と同じようにほとんど壁の花となってやり過ごした。

それ以来、首都のパーティーに参加したことはなかったのだが……

今夜、セラフィーナがこのパーティーに参加しなければならなかった理由はただ一つ——シャルドワ王国の王子二人の成人祝いだからである。

シャルドワ王国の貴族の端くれとして、王子の祝い事を無視するわけにはいかない。つまり今、セラフィーナはシャルドワ王城の広間において、国で一番洗練され、高級で、

豪華なパーティーに参加しているというわけだ。

(これが国の格式高いパーティーだとは、思いたくないけれど)

再び零れたため息は、優雅なダンス音楽にかき消されて誰にも聞こえることはないだろう。

だが、楽団の美しい生演奏でも隠し切れない悪意というものが——残念ながら——このシャルドワ王国には存在する。

「まったく、あのボンコツ王子はどうかならないものなのかしら？ 私、恥ずかしくして仕方ありませんわ」

「本当ですわね。でも、あれはもう治りませんわ。五年間いろいろな医者が診たけれど、何をしてダメだと聞きました」

「嘆かわしいわ」

セラフィーナから少し離れたところにいる二人の令嬢の会話は、お世辞にも淑女の言動とは言いがたい。にもかかわらず、周囲に咎める者は誰もいなかった。

彼女たちの言う「ボンコツ王子」とは、今日の主役の一人——シャルドワ王国第二王子のリカルド・アルリーヴァのことを指す。

セラフィーナは会場のダンスホールで一人、音楽に合わせて飛び跳ねるように踊るリカルドに視線を向けた。

ワルツのステップを無視したダンス——さらにパートナーもなく、一人で踊っているのは彼だけなのでとても目立つ。

そんな奇妙なりカルドの行動に、周囲の人々は迷惑そうな視線を向けている。近寄る人がいないので、人の多い会場の壁際に立つセラフィーナにも彼のことはよく見えた。

青みがかった銀髪がリカルドの動きに合わせてふわふわと揺れている。絹のような髪はシャンデリアの光を反射して美しい。

紫色の瞳もキラキラと輝いて楽しそうだ。

端正な顔立ちに、かっちりした正装姿。外見は年齢よりも大人びて見えるのに、手足をパタパタと動かす仕草は幼い。

五年前、母親を亡くしたことをきっかけに、リカルドの精神年齢は退行してしまった。それからずっと成長を止めている彼を、いつからか人々は「ボンコツ王子」と呼んで蔑むようになったのだ。

ソニア・アルリーヴァ——彼の母親は、側室として城に上がった女性だった。正妃である実姉ザイラになかなか子ができなかったために、姉妹の父親が計らったという。

側室は他にも何人か選ばれたけれど、男児を産んだのはソニアだけだった。さらに、同時期にザイラも王子を産んだため、他の側室たちは国王の興味を失った。

二人の王子は健やかに育ち、将来の後継者の心配は必要なくなった。特にリカルドは幼い頃から優秀で、周囲からの期待も大きかった。

ところが……リカルドが十三歳のとき、ソニアが毒殺された。

リカルドとソニアが茶を飲むとしたときの出来事だったので、親子二人を狙ったのだろう。ただし、命を落としたのは先にカップに口をつけたソニアだけだった。

毒を盛った給仕係のメイドは実行犯として、彼女の証言から側室の一人が黒幕として、すぐに捕らえられた。

側室の中で唯一男児を産んだソニアを逆恨みしての愚行だったと言われている。後継ぎを産むために城へ召されたにもかかわらず、早々に役立たずと判断された上に、リカルドが優秀に育っていくのを見て憎しみを募らせたのだらう、と。

犯人の側室は牢で自害し、メイドも死刑になったため、事件はそのまま解決したと思われた。

しかし、事件はそれだけでは終わらなかった。

目の前で母親を殺されたリカルドの心が壊れてしまったからだ。

生みの親を亡くすだけでも深い悲しみと喪失感に苛まれるだろうに、それが悪意ある者に無理やり殺められた。当時まだ十三歳だったリカルドがショックに耐えられなくても不思議ではない。

周囲の人々は最初こそ同情や哀れみを見せていたけれど、いつしか彼がなかなかそのショックから立ち直らないことを嘆くようになった。

そうして時を追うごとに、人々の落胆は嫌悪へと変わってしまった。

「優秀だという噂だったから、お父様はすぐに治ると期待していたらしいけれど、あれでは無理ね」

「母親が死んだくらいであんなになってしまったのは、どうせ国の統治などできなかった

でしょう。むしろ国が減じる前にわかつてよかったと思うべきですわ」

この国の人々は、どうしてこんなに冷徹なのだろう。

優秀な王子に期待していた分、落胆する気持ちは理解できる。だが、母親を亡くした傷心の王子を「ボンコツ」と呼ぶ神経はどうかしている。まして「母親が死んだくらいで」など……

あまりにもひどい言いようと嘲笑に、セラフィーナは拳を握りしめた。

しかし、田舎娘の怒りになど気づくわけもなく、令嬢たちのお喋りはエスカレートしていく。

「本当に。自分の成人祝いに集まった皆様への挨拶もまともにできなかつたではありませんか」

「まったく恥晒ししいところすわ」

とうとう我慢できず、セラフィーナは大股で彼女たちに近づいた。

「ちよつと貴女たち、いくらなんでも度がすぎます」

「まあ、なあに貴女？ 突然不躰に……失礼ではありませんの？」

令嬢の一人が眉を顰め、迷惑そうにセラフィーナを見る。

「失礼なのはどちらです？ リカルド様に対する貴女たちの発言は王室への侮辱になり

ますよ」

「侮辱だなんて……私は事実を述べたまでですわ。ねえ？」

令嬢が同意を求めると、もう一人が頷いてクスッと笑った。

「ええ。それとも、貴女はリカルド王子が国を治められるとでも？ 嫌だわ。これだから政治に疎い方は困ります」

「見ない顔だけれど、もしかして田舎から出てきた方なのかしら？ ドレスも地味で流石も知らない上に、中央政治への理解もないなんて……恥ずかしいですわよ」

二人の令嬢がセラフィーナを小馬鹿にすると、周囲からも失笑が漏れる。

「っ、貴女——」

「おねえちゃんたち、けんかしてるの？」

セラフィーナが言い返そうとしたところに割り込んできたのは、やや舌足らずな声。続いて腕を引っ張られ、彼女は少しよろめいた。

「けんかはダメなんだよ」

「あ……リカルド様」

ダンスフロアで踊っていたはずのリカルドが、いつのまにかセラフィーナの横にやってきて、首を傾げている。

自分を見つめる澄んだ紫色の瞳に、セラフィーナは困って視線を泳がせた。

「えっと、あの……喧嘩では、ないのですが……」

「あら、そろそろダンスのお相手を探さないと。もう行きましよう」

「そうですね。あちらに殿方がお集まりのようですわ」

リカルドの悪口を言っていた令嬢たちは、そそくさと逃げていく。その周りの人々も咳払いをして談笑に戻ったり、その場を離れたり、彼と関わりたくないと言わんばかりだ。それ以上遠くにいる者たちは、そもそもセラフィーナたちの言い争いには気づいていない。

セラフィーナはふうつと息を吐いて気を取り直し、リカルドに頭を下げた。

「お騒がせして申し訳ありません。リカルド様のためのお祝いなのに……」

「うん。僕はもう成人なんだって。あつ、成人っていうのは、おとなってことだよ。だからね、僕はけんかを止めたの。えらいでしょ？」

リカルドは両手を腰に当てて胸を反らし、自慢げに言う。

セラフィーナはその可愛らしい仕草に微笑んだ。

「そうですね。成人したのに、喧嘩はいけませんね」

「おねえちゃんも成人なの？」

「はい。私もリカルド様と同じ、十八歳の成人です」

「そうなんだ。おそろいだねえ。おねえちゃん、名前は？」

ニコニコと機嫌の良さそうなりカルドに名を聞かれ、セラフィーナはハツとして礼をする。

「申し遅れました。私はバルヴィス男爵家が長女、セラフィーナでございます」

「セラフィーナおねえちゃんかあ」

リカルドはきよろきよると周りを見回し、首を傾げた。

「おねえちゃん、お友達がいなの？」

「え？ あ……その、私は普段、王国の東側にある男爵領に住んでおります。首都に来る機会が少なく、あまり知り合いがいなのです」

「ふうん。でも今日は、ミケレに会いに来たんでしょ？ あつちに行かなくていいの？」

リカルドが指さしたほうを見ると、このパーティのもう一人の主役——第一王子ミケレがたくさんの人々に囲まれていた。

背の高いミケレは、貴族の輪の中心で彼らに対応している。

中性的な顔立ちの異母兄とは違ってやや強面だが、貴族たちへの物腰は柔らかそうだ。笑顔も見られる。剣術に長けているとの評判を裏付けるような屈強な体軀も男性らしい。

ふとセラフィーナの視線に気づいたのか、こちらを向いたミケールと目が合った。
「——っ」

ほんの一瞬、蛇に睨へびまれた蛙かえるのように身体が硬直する。

リカルドとは違う緑色の瞳から放たれる鋭い眼光は、離れていても彼女に突き刺さるようだった。

「おねえちゃん、どうしたの？ ミケールに会いに行かないの？」

「あ……後で、ご挨拶だけですわね。今は、皆さんがいらっしやいますから」

「そう？ でも、早くしないとミケールとけっこんでなくなっちゃうよ」

「結婚？ 私はミケール様と結婚するつもりなんてありません」

リカルドの突拍子もない言葉に、セラフィーナは思わず笑う。

田舎者の男爵令嬢が王子と結婚などできるわけがない。そもそも、このパーティーは二人の王子の成人祝いだというのに、自分が見初みそめられようと邪よこしまな気持ちで参加するなど……

(……私は少数派なのね)

ミケールに群がる令嬢たちが必死に自分を見てもらおうと背伸びしているのを見て、セラフィーナはため息をついた。

彼女たちの父親も、どうにかして娘を売り込もうと全方位からミケールに話しかけている。

「おねえちゃんは変なんだねえ」

リカルドがしみじみといった様子で呟くので、セラフィーナは苦笑いした。

なぜかその一言だけが妙に大人びて聞こえたせいもあるが、彼の言う通りだと思ったからだ。

セラフィーナは貴族の中では珍しい存在なのだろう。

だが、自分の立場は弁わえているつもりだ。

田舎貴族で、特に何かに秀でていないわけではない。容姿も中身も至って普通の自分が、王子に求婚されるわけがない。

「そうですね。変かもしれませんが」

「そっか。じゃあ、それも僕と同じだねえ」

「同じですか？」

「うん。僕は変なんだって。ええと……ほんこつ？」

リカルドは腕を組んで少し考えた後、ボンと手を叩く。

セラフィーナは彼自身から出た「ボンコツ」という言葉に、思わず彼の腕を掴んだ。

「おやめください。リカルド様はボンコツではありません。そのような言葉……二度と、口にしないでください」

涙が滲むのを、瞬きをして散らす。

精神的には幼くとも、リカルドは自分を取り巻く環境はきちんと理解できるはずだ。現に、自分が周囲からどう思われているのかを知っている。

誰も隠そうとすらしていないのだから当たり前だ。

それでも……こんなふうにならないうちに「ボンコツ」だと言うなんて間違っている。

「大切な人を亡くす悲しみが、どれほどのものか……想像しただけでもつらいのに……皆、勝手なことばかり……」

セラフィーナの震える声を聞きながら、リカルドはじっと彼女を見つめていた。

その表情からは彼の感情は読めない。

無邪気に笑うのでもなく、泣きそうなセラフィーナに困るのでもなく、ただ彼女を見つめるだけ。そこに色のある感情が存在するようには感じられず、セラフィーナはよくわからない不安に駆られた。

「リカルド様……？」

思わず手を伸ばしかけるが、リカルドはそれをひらりとかわし、くるくるとその場で

回る。

「おねえちゃん、怒ってるし泣いてるし、変なの」

「あ……申し訳ありません」

セラフィーナが急に「やめて」と言ったり、泣きそうになったりしたから、リカルドは状況が読めなかったのだろう。

他の人たちが口を揃えて言っていることを否定されても、矛盾する事柄に困惑するだけだ。

それに、せつかくの祝いの席だと言ったのはセラフィーナなのに、雰囲気壊してしまった。

セラフィーナは自分の配慮の足りなさを反省する。

何か楽しいことを——そう思って会場を見渡すと、軽食が並ぶテーブルが目についた。ほとんどの人が食事を終えて歓談やダンスをしているので、人目も気にならないだろう。

「あの、それじゃあ……あちらでケーキを召し上がりませんか？ とてもおいしそうですよ」

「ケーキ！ 早く行こっ」

幸い、リカルドの興味も引けたようで、セラフィーナはホッとする。後ろからついていくと、彼は色とりどりのケーキの前で目を輝かせた。

「キラキラだねえ」

餡あん細工や果物などの飾りつけに感心しているようだ。

「そうですね。リカルド様はどれが食べたいですか？」

「僕は全部」

「えっ、全部ですか？」

「うん！」

頷くや否や、リカルドは皿を取って片っ端からケーキを盛り始めた。いくら一口サイズとは言っても、種類があるのでかなりの量になる。

皿の上がケーキの山になっていくのを驚きながら見ているセラフィーナをよそに、リカルドは盛ったばかりのケーキをものすごい勢いで口に詰め込み始めた。

「んんっ、ほいひい！」

口の周りにクリームがつくのものにもかまわず、リカルドはケーキの山の頂上をべろりと食べてしまう。

そうして、最後に口の周りを舐めてニカッと笑った。

「おねえちゃんも食べて。おいしいよ」

セラフィーナにもケーキを勧めつつ、リカルドは夢中になってケーキを頬張っている。それがなんだか可笑おかしくて、セラフィーナは思わずふふっと笑った。

「本当に、おいしそうですね」

正直、先ほど壁際で孤立していたときは、食欲などまったくなかった。

貴族社会では当たり前のことなかもしれないけれど、相手の腹の中を探りながらの食事がおいしいとは到底思えない。

人の悪口を言ったり聞いたりしながら食べるのも同じだ。

だが、リカルドの底抜けな明るさを見ると、セラフィーナもお腹が空いてきた。

彼女は皿を手にとっていくつか好みのケーキを選び、最初にチョコレートケーキを口に運んだ。

「いただきます」

滑らかな口溶けの舌触りの後、ちょうどいい甘みが広がって、自然と頬が緩む。

「……おいしい」

「へへっ、でしょ？」

セラフィーナの眩きに、リカルドが誇らしげに胸を張った。

自分が作ったわけでもないのに自慢げな様子が可愛らしくて、セラフィーナはまた笑った。

この小さな幸せがリカルドを癒しているのだと感じる。

彼に対する周囲への憤りや過去の悲しみに捕らわれるよりも、こうして小さな喜びを積み重ねていくほうが、きつと前向きになれる。

リカルドがこの先、ずっとこのままだとしても……大きな悲しみから自分を守るための手段であるのなら、それが正解なのかもしれない。

王位継承の争いから外れたことだって、不幸だとは限らないだろう。

リカルドには平穏に生きてほしい。彼はもう、十分つらく悲しい経験をしたのだから。セラフィーナはそう願いながら、ケーキを頬張って嬉しそうなリカルドに目を細めた。

ケーキを食べて少し雑談をした後、リカルドは「眠くなった」と言って自室へ戻っていった。

どこに控えていたのか、年配の世話係がちょうどいいタイミングで彼を迎えに来たのには驚いた。

白髪交じりではあったが、背が高く頭の切れそうな紳士といった姿——若い頃はきつ

と女性に人気があっただろう。

マウロと名乗った彼は、リカルドをしつかりと「王子」扱いしていた。

(リカルド様も信頼しているようだったわ)

幼い頃からの側付きなのかもしれない。

そうして、眠そうに目を擦りながら「おねえちゃん、バイバイ」と手を振るリカルドを見送った後、セラフィーナは再び壁の花となった。

父は相変わらず仕事関係の話に夢中だ。

時折アイコンタクトが飛んでくるが、セラフィーナは曖昧に微笑むに留めている。

普段、首都など来ない娘に、いきなり誰かと交流しろというのも無理な話だ。

セラフィーナもすでに十八歳で、結婚相手を探すには遅すぎるくらいだとは理解している。

だが、踊るにしてもこちらから誘うわけにもいかず、もちろん誰かに誘われることもない。

元々田舎者だと思われていたところに、リカルドのことで令嬢と揉めた上、そのリカルドとケーキを食べていたのだ。

セラフィーナのレットテルはただの「田舎者」から、ポンコツ王子と仲良くする「奇妙

な田舎者」に変わった。

それ自体にはなんの不满もないが、この会場で浮いてしまっているのは気分のいいものではない。

たとえば彼女が誰もが振り返る絶世の美女であったなら、声がかかるのかもしれない。しかし、残念ながらセラフィーナは平凡な娘だ。

栗色の髪の毛も茶色い瞳の色も特に珍しくない。ドレスだって、王宮でのパーティのために特別に仕立ててもらったとはいえ、田舎貴族に買えるものはたかが知れている。たくさんの宝石をつけて着飾った令嬢の中では地味で埋もれてしまう。

(少し外の空気を吸おうかしら)

まだ帰れないのは仕方ないにしても、窮屈な会場からほんの少しでも離れたかった。

セラフィーナはゆつくりとテラスに向かって歩き出す。

外は夜風が冷たかったけれど、解放感を与えてくれた。

庭園へ繋がる階段を下り、少し歩いてベンチに腰かける。

ふうっと息を吐いて会場のほうを見ると、父がこちらを気にしていた。

娘が一人で会場を出たことに納得していない表情ではあったが、「目の届く範囲にいる」という意思も込めて手を振ると、仕方なさそうに頷く。

セラフィーナの言いたいことが伝わったのだろう。追いかけてくる様子はない。

そのうち仕事の話に熱中し始めたのか、こちらへの注意は散漫になっていった。

誰からの視線も感じなくなり、セラフィーナはもう一度長く息を吐き出す。

(あんなにキラキラした場所なのに……皆の心の中は正反対だわ)

田舎でのんびり暮らしていると、煌びやかなパーティにはほとんど縁がない。慣れない場所に出なければならぬ上に、軽蔑の視線を浴びて疲れてしまった。

リカルドは普段からこのような扱いを受けているのだろうか。

そう思ったら、なんだかやるせない気持ちになった。リカルドが悪いわけではないのに……むしろ彼は被害者だというのに、追い打ちをかけるようなことをするなど、ひどすぎる。

母親を亡くした傷心の王子に、どうして誰も寄り添おうとしないのか。

(私に何かできることがあるばいのに……)

普段、田舎の領地で暮らしている彼女にできることなどありはしない。

セラフィーナは自分の無力さに天を仰いだ。

パルヴィス男爵領で見られる夜空とは違う景色。パーティ会場から漏れる光のせいとか、それとも今の気分のせいとか……見える星の輝きが濁_{にじ}っているような気がした。

それがひどく寂しく思えて、セラフィーナはゆっくりと立ち上がる。もう少し暗い場所へ行ったら、星の光も強く感じられて、気分が晴れるのではないか。チラリと会場を確認すると、父はまだ招待客と話し込んでいた。

(少しだけ……星を見て、すぐ戻れば大丈夫よね)

誰も私のことなど気にしていないのだからいいだろう——そんな軽い気持ちで、セラフィーナは庭園を進んだ。

田舎の人気のない場所には慣れていても、きちんと整備された人工的な景色は少し怖い。

パーティ会場からの灯りも届かなくなるところで、もう一度空を見上げてみたものの、星の見え方が劇的に変わるわけではなかった。

上を向きながら、セラフィーナはゆっくりと暗いほうへ進んでいく。

そんなことをしても、首都の夜空が変わるわけではないのに……

知らない人ばかりの中で浮いてしまう自分と、領地とは違う星空の下にいるひとりぼっちの自分が重なって、余計に気分が落ち込んだ。

セラフィーナはそこで立ち止まって、静かに地面に視線を落とす。

真っ暗で足元がよく見えない。立っている場所にぼつかりと穴が空いているようで、

背に悪寒が走った。

誰も味方になってくれないというのは、どんなに心細いことだろう。

ここに本当に穴が空いていて、セラフィーナが底へ落ちても、誰も助けしてくれないのだ。(リカルド様にはマウロさんがついているわ)

それでも彼は自らをボンコツだと言った——自分に対する周囲の評価を理解している。傷ついていないはずがないのに……

セラフィーナはリカルドのことを想い、拳を握った。

「……よ……」

そのとき、ふと彼の声が聞こえた気がした。

リカルドは自室に帰ったはずだから、きつと空耳だろう。

リカルドのことを気の毒に思い、凶々しくも今の自分の状況と重ねてしまったことで、先ほどまでの彼の姿が脳裏に浮かんだせいだ。

そう思いつつも、セラフィーナは耳をそばだてる。

ただ、自分の聞き間違いであることを確認したいだけだと……どこか言い訳じみたことを思いながら、息を潜めた。

「……これ……だ………もう……」

「しかし……」

内容まではわからないが、確かにほそほそと聞こえてくる声——二人分だ。どちらも聞いたことのあるものに見える。そのうちの一人はやはりリカルドの声に似ているが、そこに無邪気さはなく、鋭く尖った響きだ。

人違いか、それとも……

「……殺してやる」

「——っ！」

セラフィーナがさらに声に集中しようと目を瞑ったのと同時に、物騒な言葉が放たれ、喉の奥から引き響いた声が出た。

「誰だ？」

慌てて口を押さえたけれど、遅かったようだ。

近くの木の陰から誰かがサッと出てきて、セラフィーナを後ろから羽交い絞めにする。

「お前は……ここで、何をしている？」

耳元で怪訝そうに問う声。ここまで至近距離で聞けば、疑う余地はない。

声のトーンや話し方など、まったく印象は異なるけれど……

「リ、カルド……様……？」

「ここで何をしているのかと聞いている」

「いた……っ」

彼の腕にさらに力が籠って、セラフィーナは呻いた。

「リカルド様、少しは手加減して差し上げては？ 相手は女性ですよ」

「俺の名前を出すな、マウロ」

「そのお言葉、そのままお返ししますよ。それに、すでにセラフィーナ様は、貴方のことをリカルド様だと認識しておいででした」

後からゆつくり姿を現したマウロは、冷静にリカルドを論している。

それを聞き入れることにしたのか、リカルドの拘束が少し緩んだ。

「いつからここにいた？」

「申し訳、ありません……お話を聞くつもりはなかったんです」

「聞くつもりがないのに、気配を消して耳を澄ませていたのか？」

「っ、それは……その……本当に、最初はそんなつもりではなくて……少し外の空気を吸いに来ただけなんです。そうしたら、聞き覚えのある声が聞こえた気がして、つい……」

言い訳じみた言葉しか出てこず、セラフィーナの声は尻すぼみになっていく。

雰囲気はかなり違うが、セラフィーナの後ろにいるのがリカルドであることは間違いない。

ない。

状況からして、まずい話を聞いてしまったらしいこともわかる。

「あの、ですが……お話と言っても、はつきりと聞こえたのは……その……最後の……」

聞いたのは「殺してやる」という一言だけです——と、口に出すのは憚はばられた。というよりも、言いながら、一番聞いてはいけない部分を聞いてしまったのではないかと思っただけだ。

「それだけ聞いていれば十分だ。そもそも、俺の姿を見ずとも『ボンコツ王子』だと気づいた時点で、お前の命はない」

物騒なことを口にしつつも、彼はとても落ち着いていた様子だった。

「ほ、本当に……リカルド様なんですか？」

まだ振り返る勇氣はなく、姿は見えていない。

だが、声は確かにリカルドのものだし、マウロもそれに関しては肯定した。

「そうだ。セラフィーナ・パルヴィス……お前は俺の秘密を知ってしまった」

「あっ」

その瞬間、くるりと身体が反転する。

リカルドはセラフィーナと向き合っていると、彼女の頬を両手で包み込み、視線を上げさせた。

星明かりが少なく、暗いと思っていたはずなのに、リカルドの顔はよく見える。

綺麗な紫色の瞳がしつかりとセラフィーナを映し、その鋭い視線は彼女を冷たく射貫いた。

逃げられない——本能的にそう感じる。

否、リカルドはセラフィーナを逃がさないために、自らの姿を彼女の視界に映した。

これ以上、言い訳ができないように。

「私……っ、誰にも、言いません！ 秘密にしなければならぬ事情があるのですね？ だとしたら、私は秘密を守ります」

「そんな口約束を信用しろと？」

そう言われたら、ぐうの音も出ない。

この状況で「私は貴方の秘密を暴露します」と言う人間は、かなりの少数派だろう。その場凌しのぎだと思われるのも仕方がないことだ。

「もちろん、口約束では不十分でしょう。リカルド様がお望みなら、誓約書でもなんでもサインします！」

「残念だが、この場にはインクもペンも、紙もない。そもそも誓約書など書いたところ、お前の口に戸が立つわけではあるまい」

フンツと鼻で嗤^{わら}われて、セラフィーナは必死に頭を回転させる。「でも、リカルド様もすでにご存知でしょう？ 私に友人と呼べるような人はいません。私の話を信じる人もいなければ、噂を広める伝手^{つて}もないのです。パーティが終わったら、田舎の領地に戻るだけの、つまらない娘です」

「ポンコツ王子などをかばう、奇妙な女だからな」

「そっ、そうです」

セラフィーナは首を小刻みに上下させ、リカルドに同意する。

リカルドはそんな彼女を品定めするかのように目を細めた。

まるで、どのように殺そうか考えているようで、セラフィーナは唇を震わせた。

「な、んでも……なんでもします。絶対に秘密を漏らさないと、命を懸けて誓います」まさか今すぐ殺されることはないだろうけれど、自分の命がリカルドに握られていることに変わりはない。

彼を納得させられなければ、人知れず消されるだろう。

「リカルド様、放して差し上げてはいかがですか？ セラフィーナ様も、なんでもするとおっしゃっていますし、命まで取らなくても……人を殺すにも、証拠を残さずにやるとなるといういろいろ大変なんですよ。まして、彼女は男爵家のご令嬢です」

リカルドの代わりに発言したのはマウロだった。

穏やかな口調に反して「証拠を残さずにやる」という恐ろしい物言いは気になるが、命には代えられない。

セラフィーナは彼の言葉に再び何度も頷いた。

必死な彼女を不憫^{ふびん}に思ったのか、マウロはさらに味方してくれる。

「ここに長居していても、我々にメリットはないでしょう」

「……わかった」

他の人間にも見つかると危険性を考えたらしい。リカルドは諦めのため息をついてセラフィーナから離れた。

「マウロ。残りのパーティの間、セラフィーナを監視しろ。俺は部屋に戻る」

「かしこまりました」

マウロに指示を出し、リカルドは再びセラフィーナに視線を向ける。

「セラフィーナ」

「っ、はい！」

「今日のところは見逃してやる。余計なことを言ったり、逃げたりしたら……どうなるか、わかるな？」

「もっ、もちろんです！」

セラフィーナは首がもげそうなほどに頷いて、絶対服従の意思を示す。

縦に振りすぎて、首が身体から分離してしまいそうだ。

「……なんでもすると言ったことも、忘れるなよ」

リカルドはしばらくセラフィーナを見つめていたが、やがてそう言い残し、暗闇へ消えていった。

どこから自室へ帰るのかはわからないけれど、きっとリカルドにしかわからない道があるのだろう。

セラフィーナの忠誠心を見定めるような鋭い視線は、彼が去った後も彼女の身体を拘束していた。

「セラフィーナ様、貴女も会場へ戻ったほうがよろしいでしょう」

「あっ、はい。そうですね」

どれくらい暗闇を見つめていただろうか。マウロに声をかけられてようやく我に戻ったセラフィーナは、あたふたと踵かかとを返した。

父が娘の姿が見えないことに気づいていたらまずい。

大変なことになってしまったと理解しつつも、何が起こったのかよくわからないよう

な変な気分だ。

(リカルド様……だったのよね……)

自分の目ではっきりと見たはずのリカルドの姿——つい先ほど一緒にケーキを食べた彼とはまるで別人だった。

楽しそうに過かごせているのなら幸せだと思ったのも、ほんの少し前のことだったのに……

(殺してやる、なんて……)

ケーキを食べた幸せそうだったのも、セラフィーナを変だと言って楽しそうにしていたのも、すべて仮初めかりそめ……？

(嘘、だったの?)

リカルドが本心を隠して無理やり「ポンコツ王子」を演じているのだとしたら、こんなに悲しいことはない。

セラフィーナは彼の心が年相応に戻らなくてもいいと思った。

幸せならばそれでいい、と。

だが、それが全部真つ赤な嘘だったのなら……無理やり演技をして隠しているのだとしたら、「幸せ」であるわけがない。

リカルドの上辺だけしか見えていなかった——その事実がセラフィーナの胸をひどく締め付けた。

敵意をむき出しにして、自分に対峙たいじしていたリカルド。ひた隠しにしている秘密を今日出会ったばかりの娘に知られ、きつと恐ろしかったことだろう。

今の彼の味方はマウロだけなのだ。セラフィーナを信用しろというのは無理がある。自分の監視をするように命じたリカルドの気持ちも理解できた。

けれど……

(私は……リカルド様の味方になりたい)

誰も寄り添おうとしない彼の力になりたいと思ったのは本心だ。今までずっと傷つけてきたリカルドの幸せを願っている。

彼の不利益になることは絶対にしない。

リカルドと二度と会うことがなくても、約束は守ろう。それが唯一、自分にできることならば……

心の中でそう決意して、セラフィーナは再び煌びやかな会場へ足を踏み入れた。

翌日。

セラフィーナは首都の別荘から領地へ帰るための荷造りをしていた。

昼食を済ませた後ということもあって、部屋窓から差し込む優しい日の光に眠気を誘われる。太陽だけは領地にいるときと同じだ。

昨夜のパーティーで荒んだ心を癒してくれる気がする。

首都で過ごしたのはたった数日だったのに、とても長く感じられた。

ようやくパーティーも終わり、日常に戻る——そう安堵の息を吐き出したとき、使用人が部屋に飛び込んできた。

「セラフィーナ様、大変です！」

血相を変えた使用人の慌てぶりに、セラフィーナは目を丸くする。

彼女は来客の対応をしていたはずだ。父の仕事関係の客だと思っていたが、この様子だとそうではなさそうだ。

「そんなに慌ててどうしたの？」

「それが、その、あのっ！」

「落ち着いて。何かあったの？」

セラフィーナが聞くと、使用人は震えながら口を開く。
「城からの遣いの方——マウロ・ジェリーニと名乗る方がいらっしやって……セラフィーナ様を、リカルド王子の婚約者にとおっしゃっております！」

「マウロさんが……？ え？ リカルド様の……婚約者!?」

あまりにも突拍子のない報告にぎよつとして、セラフィーナは綺麗に畳んだばかりの室内用ドレスを床に落とした。

「はい。リカルド様が、昨夜のパーティでセラフィーナ様を気に入られたと……」

セラフィーナは腰を屈めたまま使用人へ視線を移す。彼女が目を白黒させているのを見れば、それが嘘ではないことは一目瞭然^{ワヤヤ}だった。

もちろん、使用人が雇い主の娘に嘘をつく理由などない。いや……むしろ、冗談だと思いたかつたのはセラフィーナのほうだ。

昨日の今日で、リカルドの婚約者になるようにとマウロが直々に屋敷を訪ねてきている——王子がセラフィーナを逃がすまいとしていることは、火を見るより明らかだ。

——今日のところは見逃してやる。

リカルドの言葉を思い出したら、背中に冷や汗が伝った。

(今日のところは、つて……つまり、『見逃してくれない』つて意味だったの?)

確かにリカルドは「今日」と限定した言い方をしたけれど、まさか翌日に婚約を持ち掛けてくるとは誰が予想できただろう。

「セラフィーナ様……王子のご希望をなんでも叶えて差し上げるとおっしゃったのですか?」

「え? あ……ええ、まあ……そう、ね」

確かにセラフィーナは昨夜「なんでもする」と言った。実際には自分の命が懸かっていたための咄嗟の言葉だったが、ものは言いようだ。

(まさか婚約だなんて……)

しかし、約束は約束だ。

秘密を守り、なんでもすると宣言した以上、「やっぱりなし」とは言えないし、言うつもりもない。

セラフィーナはリカルドの味方になると決めたのだから。

「それで、私を婚約者にしたってリカルド様がおっしゃっている、と言うのね?」

「……はい。マウロ様は、そのように……」

セラフィーナが確認をしながらドレスを拾い、畳み直してトランクに入れると、使用人が言いにくそうに口をもごもごさせた。

「あの……それで、マウロ様が……」

セラフィーナと彼女の荷を交互に見ながら、使用人は小さな声で続ける。

「領地へは帰らずに、今すぐ……城へ来てほしいと……リカルド様が寂しがっていらっしやるとのことです」

「……そう」

セラフィーナはトランクの蓋かたを閉め、持ち上げた。

幸か不幸か……必要最低限の荷物しか持たずに首都へ来たから、軽くて助かる。

「荷造りも終わったからちようどいいわ。お父様にはなんて？」

「え？ あ、マルティノ様にはマウロ様からご説明が……」

「それなら、話が早いわね」

「セラフィーナ様!? えつ、まさか、このまま城へ行かれるおつもりですか？」

ほとんど動揺を見せないセラフィーナに対し、使用人は困惑しきりだ。

もちろん、彼女はリカルドとセラフィーナの間に起こったことを知らないのだから、当たり前だろう。

しかし、セラフィーナは自分がなぜ城へ呼ばれたのか、リカルドの婚約者になれと言われているのか、すべてを理解している。

それを断ることができないことも。

セラフィーナに選択肢は一つしかない。

「マウロさんの言った通りよ。昨夜のパーティで、リカルド様と仲良くなったの。きつと私のことを気に入ってくださったんだわ」

「気に入ったとおっしゃいまして……しかし、リカルド王子は……」

ポンコツではありませんか、という言葉は、かろうじて呑み込んだのだろう。

使用人はセラフィーナに哀れみの視線を向けた。

「リカルド様も私と同じ十八歳、成人よ。婚約者を決めるのは自然なことでしょう？」

「それは……そうかもしれないが……」

「大丈夫。昨夜は少ししかお話しできなかったから、改めて招待されたのだと思うわ。このまま一生領地に帰れないなんてことはないはずよ」

そう言ったものの、本当のところはわからない。

昨夜のリカルドの様子を思い出すと、セラフィーナを妻に迎えたフリをしてそのまま殺してしまう……ということも、あり得ない話ではなさそうだからだ。

(そんなまさか、ね)

我ながら話が飛躍しすぎだ。

マウロは「人を殺すのは簡単ではない」と言っていたではないか。いつのまにか、ごく自然に物騒な想像ができるようになった自分に気づき、セラフィーナはふうっと長い息を吐いた。

（パーティの後、秘密を漏らしていないか確認するだけよね。しばらく婚約者としてそばに置いて、私の口の堅さを試したいのかも）

セラフィーナは再びため息をつく。

そんなことをしなくとも……とは思うけれど、初対面の娘を簡単に信じろと言うのも無理がある。

セラフィーナにできることは、できるだけ早くリカルドに信用してもらえよう努めることだけだろう。

「荷物を持ってきてくれる？」

「かしこまりました」

使用人がついてくるのを確認し、セラフィーナは部屋を出た。

玄関では、穏やかな笑みを浮かべたマウロが彼女を待っていた。応対に出てきた父マルティーノは止まらない脂汗を拭っている。

「セラフィーナ様。突然の訪問をお許しください。リカルド様が貴女を恋しがって手をつけられず……どうか城へいらっしやっただけませんか」

「ええ、もちろんです。リカルド様とは昨夜、お約束しましたから」

言葉だけを聞けば、和やかな雰囲気だけれど……「恋しがって手をつけられない」の意味がわかるのは、セラフィーナとマウロの二人だけだ。

実際は、リカルドが秘密を暴かれることに危機感を覚えており、セラフィーナを目の届く場所に置きたいのだろう。

「では、バルヴィス男爵。詳細は先ほどお伝えした通りでございます。セラフィーナ様のことは責任を持ってお守りいたしますので、どうかご安心を。正式な婚約発表や結婚式につきましては、改めてご連絡いたします」

「は、はあ……本当に……リカルド様と娘が……。セラフィーナ、大丈夫か？」
マルティーノは驚きの表情で呟いた後、娘を見る。

「心配なさらないで、お父様。私は大丈夫です」

マウロが妙に具体的な話をしていることには不安があるけれど、だからと言って逃げ出すわけにはいかない。

父に怪しまれても困るので、セラフィーナは笑みを浮かべて見せた。

「それでは、参りましょうか」

「はい」

マウロが使用人から受け取ったセラフィーナのトランクを御者に渡す。

そのまま彼女をエスコートして馬車に乗せ、自分は違う馬車へ乗り込んだ。

城からの遣いだと一目でわかるほどの豪華な箱が二つ、それらを引く毛並みのいい馬たち……首都でも珍しい光景に興味津々の人々の姿が窓から見える。

セラフィーナは窓のカーテンを引き、ため息をついた。

「大変なことになってしまったみたい」

そう、眩きながら――

馬車に揺られていたのはほんの数十分ほどで、城についてからはマウロが案内してくれた。

正門にいた警備の騎士たちは、セラフィーナを見て怪訝そうな顔をし、ひそひそと同僚に何かを囁く。

廊下を歩けば使用人たちも一様に同じ反応を見せた。昨夜のパーティと代わり映えない光景に、セラフィーナは心の中で大きなため息をつく。

（噂が広まるのが速いのね）

首都に来てからため息ばかりついている。こんなに大変なことになってしまおうとは、ため息をつくときと幸せが逃げるというのもあるが間違いではなさそうだ。

周りの様子を視界に入れないように、セラフィーナはできるだけマウロの背中のみを見て歩いた。

そうして辿り着いたのは、謁見の間。重厚な扉が開かれると、入り口からは赤い絨毯が伸び、その先に国王夫妻が豪華な椅子に座っている。

パーティ会場ほどの大きさはないものの、シャンデリアの輝きは昨夜に劣らず、壁には歴代の王の肖像画が並んでいる。

「おねえちゃん！」

「わっ……」

セラフィーナが一步踏み出そうとするよりも前に、タタタツと軽快な足音が近づいてきて、一人の青年に飛びつかれた。

その勢いと驚きで倒れそうになるのを、飛びついた本人――リカルドがそれとなく支えてくれる。

「やっときた〜！ 待ちくたびれちゃったよ」

「あ……ごめんなさい……？」

昨夜の冷徹な王子と対峙しなければならぬと思っていたから、拍子抜けしてしまう。ぶくつと頬を膨らませて拗ねた表情を見たら、昨夜のことは夢だったのではないかとすら思えた。

この場にはたぐさんの人がいるから、リカルドがボンコツ王子を演じるのは当たり前前ではあるのだけれど……

「リカルド、セラフイーナが困っているではないか。甘えていないで、こちらまでエスコートしなさい」

「は〜い。おねえちゃん、こっちだよ」

父王に諭され、リカルドがセラフイーナの手を引いて玉座の前へ導く。

セラフイーナは慌てて彼についていき、国王夫妻の前で腰を折った。

「セラフイーナ・パルヴィスと申します。本日は——」

「こちらから呼び出したんだ。頭を上げて楽にしてくれ」

「は、はい」

そう返事はしたものの、国王が自分に注目している状況で緊張するというのは無理な話だ。

セラフイーナはカチコチになりながら、頭を上げて背筋を伸ばした。そんな彼女の隣には、リカルドがびたりとくっついて腕を絡めてくる。

「さて……早速だが、本題に入ろう。すでにマウロから聞いていると思うが、我が息子……リカルドがそなたと結婚したいと言っておる」

「昨夜、リカルドと遊んでくれたでしょう？ それで、この子は貴女のことを気に入ったみたいなの」

国王に続いて言うのは、王妃のザイラだ。

口調は穏やかで、セラフイーナにも優しく微笑みかけているのだが、やや近寄りすぎた印象がある。

（銀色の髪がリカルド様と似ているわ）

ザイラとリカルドの母ソニアが姉妹なのだということを証明しているようだ。瞳の色も同じ紫で、リカルドと本当の親子だと言われても疑問を抱く人はいないだろう。

第一王子ミケールは父王に似ているらしい。

「貴女も知っているでしょうけれど、リカルドの母親は私の妹よ。私もリカルドのことは実の息子のように思っているわ。だから、こうしてこの子を気にかけてくれる娘が現れて……嬉しいの。ぜひ、城へ上がってくれないかしら？ もちろん不自由はさせないわ」

「うむ。リカルドも十八歳だ。自ら公務を行うことが難しくとも……体裁は整えてやりたい。せひとも、リカルドの伴侶となってくれ」

国王夫妻の言い方は、リカルドとセラフィーナの結婚を決定事項として告げているように感じられた。

それもそうだろう。ただの男爵令嬢に王子との縁談を断る権利などありはしない。

(そういうことなのね)

セラフィーナを疑いながらも、昨夜あっさり逃げさせてくれたのは、こうして確実に捕らえる方法があったからなのだ。

婚約というもつともらしい理由をつけたのも、誰一人反対しない——むしろ、歓迎されることを知っていたからに違いない。

国王夫妻は王位継承争いから外れた「ポンコツ王子」の扱いに困っている。仕事でも使い物にならなくなり、私生活でも五年間ずっと幼子のまま……まともな結婚生活を送れるとは到底思えない息子をどうするか。

年齢的には成人した息子を結婚させたくとも、中途半端な貴族を選べば、政治に口出しされてしまう。リカルドを傀儡（かいらい）として王に立てようと、再び王位継承問題にもなるかもしれない。

その点、他の貴族との繋がりをほとんど持たない田舎貴族——パルヴィス家は安心安全というわけだ。

位の高い貴族令嬢を指名すれば、「ポンコツ王子に娘を嫁がされた」彼らの王家への反発（まぬか）も免れない。

セラフィーナが横にくつついているリカルドを見上げると、彼は「えへへ」と無邪気に笑った。

「けっこん、していいって！」

大人たちの会話などわからないと言っても言いたげな笑顔だ。しかし、セラフィーナに絡めた腕にはしっかりと力が籠っていて、「逃がさない」という意思が感じられる。

リカルドは自分がセラフィーナを気に入ったと言えば、父王と正妃が反対するわけがないと知っていた。

ミケールとリカルドが成人となった今、正式な次期国王を発表する日は遠くないはずだ。

すなわち、五年も「ポンコツ王子」のままだったリカルドが元に戻ることを諦める日がくるということ。

ミケールに王位を継がせて内政を安定させ、リカルドにも伴侶を与えて対外的な体裁